

京都府

藤布

丹後で織り継がれる古代布

縄 文時代より織られている原始布のひとつです。「万葉集」のなかで「藤衣」と詠まれ、この頃には衣に用いられたことがわかります。水に強く耐久性があるので、漁網や畳の縁などに使いましたが、江戸時代以降、木綿の普及により衰退し、途絶えたとされてきました。しかし丹後の上世屋地区で山村の手仕事として伝承されていたことがわかり、技術を受け継ぐべく丹後藤織保存会が発足しました。現在は丹後地方（網野、加悦）で、主に帯が織られています。材料は山に自生する藤の蔓。表皮（鬼皮）、中皮（アラソ）、芯の三層になっており、糸にはアラソの繊維を用います。京都府無形民俗文化財、京都府知事指定京もの指定工芸品、国の重要有形民俗文化財。



1 藤布の帯 2 4月から6月に山に入り、藤蔓を採取 3 乾燥しないうちに木槌で叩き、柔らかくして表皮をはぎ、アラソを取り出して乾燥 4 アラソを水に浸けて木灰で4時間炊きます 5 清流に浸け、竹の器具で不純物をしごき落として白い繊維に 6 米糠を溶いた湯に入れて柔らかくした繊維を裂き、撚り合わせて糸に 7 糸に撚りを掛け、経糸に糊付けて織ります

撮影=宮川 久 協力=木の布工房[遊絲舎]
文=朝香沙都子

京都府

丹後ちりめん

紋意匠縮緬に代表される白生地代表格



1 地紋が際立つ紋意匠縮緬 2 かせになった生糸を糸枠に巻き取ります。その後、緯糸に撚りをかけます 3 ジャカード機で織ります 4 白生地を精練液の入った水槽に入れて精練します。最初に粗練りしてから水洗します 5 さらに本練りをして水洗、漂白後に水洗、仕上げ練りして水洗と繰り返します 6 縮んだ幅や丈を整えます

撮影=中村 淳[静物] 久保田康夫[取材]
協力=丹後織物工業組合 篠春織物 文=朝香沙都子

京

都府丹後地方で織られる縮緬の総称。湿度が高く絹織物に適した土地であり、古くから絹布が織られていました。江戸時代に絹屋佐平治が西陣より持ち帰った糸撚りやシボ出しの技術をもとに織られたものが始まりといわれます。経糸に撚りのない生糸、緯糸に1mあたり三千回前後の強い撚りを掛けた生糸で織ります。製織後、精練して膠質のセリシンを取り除くと糸が収縮し、緯糸の撚りが戻ることによって生地全面に凹凸状のシボを生じるのが特徴です。このシボによって染め付きが良く、しなやかな風合いのシワになりやすい生地になります。多様な縮緬を作っていますが、紋意匠縮緬が代表的。京都府知事指定京もの指定工芸品。

